

保守系オピニオン誌における外国人言説（２） －1990年代後半における雑誌『SAPIO』を中心に－

Discourse on Foreigners in Japanese Conservative Opinion Magazines(part 2) :
Focusing on Magazine Articles of *SAPIO* in the second half of 1990's

倉 真 一

本稿では引き続き雑誌『SAPIO』における外国人言説の分析を、1990年代後半、分析上の時期区分では第三期および第四期前期に該当する雑誌記事を中心に行った。第三期においては「外国人の定着化」が語られると同時に、それがもたらす「日本社会」や「われわれ＝日本人」のナショナル・アイデンティティの揺らぎと不安が語られたが、在日外国人に対する〈有益な外国人〉－〈有害な外国人〉という二項対立的な図式によるカテゴライズは現れなかった。第四期前期の特集記事では、在日外国人が強い主体としてイメージされる傾向が強まると同時に、〈有益な外国人〉と〈有害な外国人〉という二項対立的イメージの混在がみられた。これは在日外国人が強い主体としてイメージされる時、その強さはホスト社会とそのマジョリティにとって利用可能なものでもある一方で、その強さは時に犯罪などのリスク源としても認知されうること。前者であれば〈有益な外国人〉イメージに、後者であれば〈有害な外国人〉イメージに強く結びつけられること。さらに強い主体としての在日外国人と日本社会・日本人がいかなる関係性を結びうるのか未確定であるとの認識が、記事における在日外国人のイメージにおける〈有益な外国人〉－〈有害な外国人〉という二項対立的なイメージの混在状況を生じさせたことが明らかになった。

キーワード：ナショナル・アイデンティティ、強い主体、〈有益〉－〈有害〉図式

目 次

- I. はじめに
- II. 分析上の時期区分における1990年代後半の位置づけ
- III. 第三期(1996年～1998年前半)
 - －「定着する外国人」とナショナル・アイデンティティの揺らぎと不安－
- IV. 第四期前期（1998年後半～1999年）
 - －「強い主体」と〈有益な外国人〉－〈有害な外国人〉イメージの混在－

I. はじめに

筆者はすでに前稿において、1980年代以降に創刊された新興の保守系オピニオン誌の一つである雑誌『SAPIO』における在日外国人に関する言説を、その創刊から1990年代前半まで分析した。そのなかで明らかになった点は以下のとおりである[倉, 2006]。

第一に、「われわれ＝日本人」というナショナルな主体による「混住社会ニッポン」の実現が90年代初頭には語られていたが、そこで暗黙に想定されていた「外国人」とは、『SAPIO』の主要な読者層である企業サラリーマン層からみて同質性が高く、理解可能でコントロール可能な客体、いわば他者性を縮減された「外国人」であった。第二に、しかし「外国人犯罪」に関する記事のなかで、「外国人」＝加害者（主体）と日本人＝被害者（客体）という図式が強まり、「外国人」を理解やコントロールが困難な他者性を孕んだ主体として表象するようになるにつれ、最初期の「混住社会ニッポン」を構想する政策主体としての「われわれ＝日本人」という言説は後退し、やがて「混住」というキーワードは誌面上から消えてしまう。第三に、かわりに誌上に現れたのは、日本社会にとって<有益な外国人>－<有害な外国人>という二項対立的な図式の萌芽であった。

本稿では、その後の雑誌『SAPIO』において、先述の「われわれ＝日本人」というナショナルな政策主体がどのように変容していったのか、またそれと同時に、<有益な外国人>－<有害な外国人>という二項対立的な図式がどのように展開することになるのかを、1990年代後半における記事を中心に分析することにした。1990年代後半に注目する理由の一つは、上記のナショナルな政策主体の変容と再構築の点からも、<有益>－<有害>という二項対立的な外国人言説の点からも、この時期がいわば過渡期ともいえる性質をもっており、2000年代以降の展開を論じる上での転換点でもあったからである。

II. 分析上の時期区分における1990年代後半の位置づけ

分析上の時期区分を筆者はすでに前稿において示したが[倉, 2006:117-118]、改めてここで提示しておきたい。そのうえで本稿の分析上の時期区分のなかで、1990年代後半がどのように位置づけられるものなのか確認しておこう。

<分析上の時期区分>

①第一期 1989年～1993年	④第四期 1998年後半～2002年前半
②第二期 1994年～1995年	⑤第五期 2002年後半～
③第三期 1996年～1998年前半	

このうち第一期と第二期に関しては、前稿ですでに分析を行っている。よって本稿の分析対象

となる時期はまず第三期であり、1990年代後半ということになれば第四期の一部も含まれることになる。第三期および第四期に関して、各時期の代表的な『SAPIO』誌上の在日外国人に関する特集のテーマやタイトル、特集の中でどのような外国人をいかにカテゴライズしているか等の視点から概観してみたい。

第三期は特集「『日本』よ、お前はいったい何者か？」（1996年6月12日号）や、特集「『外国人たちのニッポン占領』拡大する無法地帯、ボーダレス・ビジネス…融解を始めた『日本』の最前線レポート」（1997年1月15日号）といった特集記事があるように、在日外国人と関連づけながら、揺らぐナショナル・アイデンティティと揺らぎへの不安が示されている。ただし1997年1月15日号がそうであるように、特集における在日外国人は雑多なカテゴリーの集合として取り上げられており、それぞれのカテゴリーも<有益な外国人>－<有害な外国人>という二項対立的な図式では分類できない取り上げ方になっている（表1参照）。

第四期では、在日外国人が全般に「強い主体」として語られる傾向が強まる。ただし外国人が強い主体として語られるとしても、そこで描かれる外国人のイメージ（表象）が第四期を通じて不変であった訳ではない。そこで第四期をさらに三つの時期（前期、中期、後期）に再区分し、分析することにした。具体的には、第四期の前期が1998年後半から1999年まで、中期が2000年から2001年前半まで、後期が2001年後半から2002年前半までとなる。このような形で再区分を行った理由は、「強い主体」としての在日外国人イメージは、強い主体である他者をどのようにイメージし、どのように対処すべきかという点で、幾つかの異なったバリエーションを産み出す可能性を持っているからであり、それぞれの時期において特徴的なイメージ、主流となる「他者への対処の技法」が認められるからである⁽¹⁾。それは同時に、おのおの「他者への対処の技法」と関連して特定の主体（例えば、排除する主体）が構築されていく過程でもある（前期については表2参照）。

大まかに言えば、第四期の前期では、「強い主体」としての在日外国人のイメージは、<有益な外国人>または<有害な外国人>のうちどちらか、といった形での特定の方向性を持つには至っていない（あるいはどちらともと言える状況）。しかし中期になると、イメージの方向性は明確になり、<有益な外国人>イメージが、<有害な外国人>イメージも伴いつつ前面に出てくる。後期においては逆に<有益な外国人>イメージは後退し、<有害な外国人>イメージが前面に出てくることになる。

ここで確認しておこう。本稿が分析対象とする1990年代後半における雑誌『SAPIO』の在日外国人関連記事は、具体的には第三期および第四期のうちの前期、すなわち1996年から1999年の間に掲載されたものである。それでは第三期の『SAPIO』における外国人言説から分析を始めたい。

III. 第三期（1996年～1998年前半）

－「定着する外国人」とナショナル・アイデンティティの揺らぎと不安－

第三期における『SAPIO』の在日外国人関連記事では、すでに概観したように「『日本』よ、お

画し遂行していく「われわれ＝日本人」という主体は、(ナショナル・アイデンティティが揺らいでいるとされるのだから当然なのだが) 容易には構築あるいは再構築され難いであろう⁽²⁾。

表1 第三期の『SAPIO』在日外国人関連記事（1996～1998年前半）

1996年 6月12日	<SHIMULATION REPORT> 「日本」よ、お前はいったい何者か？ 不法就労者 新宿・歌舞伎町「ビニ本通り」でアジアを内包しながら増殖するニッポンを見る 「新3K」価格破壊、空洞化、雇用不安を加速するアジア人労働力、そして「不法滞在ベイビー」…（森田靖郎）
1997年 1月15日	<SHIMULATION REPORT> 「外国人たちのニッポン占領」 拡大する無法地帯、ボーダレス・ビジネス…融解を始めた「日本」の最前線レポート [上海vs福建] 新宿歌舞伎町の抗争はどう変わったか 『不夜城』に異変あり！ 1ドル＝110円で日本人になりたい中国人が急増（森田靖郎） 「メディアM&A」あり「身売り」あり 欧米企業ばかりかアジア企業も！「日本企業買収」にカネも意欲も満々（水野隆徳） 今や六本木は南へ旅する「北欧美女」が羽を休める「ミッドナイト・タウン」！ スウェーデン女性急増の実情を写真で検証（E. ブラウン） 無法地帯・新宿の“平成版仁義なき戦い” 香港・台湾マフィアの日本ヤクザへの浸食を物語る歌舞伎町「泥棒市」（木村勝美） 黒人米兵に群がる女たちの内面世界 自称「ブラバン」。彼女たちの子宮こそ日本の男が触れない「異界」なのか（山下柚実） 日本社会に根を張ったイスラムパワー 北一輝、大川周明、松岡洋右らが活躍した知られざる「ムスリムTOKYO」の歴史（田澤拓也） 座談 「在日の参政権」で激論2時間半！ 「二重国籍を認めるべきだ」vs「それなら帰化せよ！」（李英和／鄭大均／呉智英） 平成版「外国人居留地」4地域を現地ルポ 『ニッポンの中の異国』 リトル・ブラジル（群馬県・大泉町）日本人以上によく働き、よく遊ぶ！この街の“日系ブラジル人”たちは“出稼ぎ”を捨て始めた（入江一） リトル・バンコク（東京・新宿）「ワタシモアブナイヨ」－それでも“タイ人ホステス”は歌舞伎町を目指す（岩本宣明） リトル・インドネシア（東京・上野公園）イラン人に代わって上野公園を“占拠”インドネシア青年の意外な生業 リトル・コロンビア（東京・新大久保）イラン人を用心棒に「金髪」で稼ぐコロンビアナーの「夜の出稼ぎ商売」
1998年 4月8日	「国民皆ボランティア」制度を提唱する 内外識者10人「私はどう考える」 日本人だけで「国家」を支えるより外国人労働者受け入れのハードルを低くせよ（宮崎哲弥）

(注)大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』（各年版 紀伊国屋書店）を用いた記事検索（検索キーワード＝「外国人」）に加え、実際に雑誌記事を閲覧したうえで筆者が作成。

では在日外国人に対する、例の二項対立的な図式はどうであろうか。これも第三期では<有害な外国人>も<有益な外国人>もともに明確な形では現れてきていない。確かに記事のなかには、外国人犯罪に対する記述がないわけではないが、外国人犯罪そのものをテーマとした記事がないのも第三期の特徴の一つであり、典型的な<有害な外国人>イメージはこれを見出すことは出来ない。同様に<有益な外国人>イメージも、雑多なカテゴリーの実態報告に近い第三期の記事

前はいったい何者か？」(1996年6月12日号)や、『外国人たちのニッポン占領』拡大する無法地帯、ボーダレス・ビジネス…融解を始めた『日本』の最前線レポート」(1997年1月15日号)といった特集記事にあるように、新宿・歌舞伎町をはじめとする日本各地における在日外国人の集住地やたまり場がレポートされるなか、ナショナル・アイデンティティの揺らぎが『日本』とは何者か」という問いから「アジアを内包しながら増殖するニッポン」(1996年6月12日号)へ、「融解を始めた『日本』の最前線」から「外国人たちのニッポン占領」(1997年1月15日号)へとといった形で、「日本」から「ニッポン」への変容として語られる。そのようなナショナル・アイデンティティの揺らぎ(変容)という事態を促進しているとされるのは、「日本」を「ニッポン」に変えていく外国人たちの日本への定着である。

例えば1996年6月12日号の記事では、中国人の「日本への密航は、むしろ安定期に入った」という見解が紹介され、同じ筆者による1997年1月15日号の記事では、「出稼ぎにきているはずの中国人が、最近では帰りがたがらないよ」との中国人手配師の声が紹介される。同様の見方は同じ号の「リトル・ブラジル」群馬県・大泉町ルポのなかでも繰り返され、「日系ブラジル人」たちが当初の母国への送金を目的とした「出稼ぎ」を捨て、「今この地にどっかと腰を下ろしている」と報告される。

このような外国人たちの日本への定着という事態は、1996年6月12日号の記事のサブ・タイトルにおいて「不法滞在ベイビー」という形で象徴的に表現され、「アジアの安価な労働力を背景」にした「価格破壊」「空洞化」「雇用不安」という不安が、日本国内での「不法就労外国人の急増」とともに語られるのである。1997年1月15日号の特集記事前文においても、「はたと気がつけば、いま裏社会や夜の街ばかりでなく、ビジネス社会でも地域共同体でもボーダーの融解がますます過激な色調を強めながら進行中」とあり、「なし崩し的なアノミー（混沌）の拡大をそのまま放置するのか？」という不安からの問いが発せられる。この問いへの答えは、「事ここに至って排外主義など論外とするなら、精神風土としても社会システムの改変という面からも、彼ら押し寄せる“異国の民”との共生という手段を日本は今すぐ持たなくてはならない」というものである。

しかしこのような切迫した回答にもかかわらず、「サピオ流『世紀末の文化人類学』」と銘打たれた特集本文で取り上げられる内容は、雑多なカテゴリーの在日外国人たちの実態報告というべきものであって、具体的な政策提言といったものはほとんど見られない。ただし『『在日の参政権』で激論2時間半！』という記事では、「日本の近代史で最も長い歴史をもつ外国人」として、「旧植民地出身者」という「在日外国人の参政権と国籍の問題」が取り上げられている。しかしながら同記事において「在日韓国・朝鮮人および台湾人」は、「新たな外国人の流入によって、彼らの“外国人”として存在は希薄になりつつある」ものとして把握されている。であれば、ここで語られている政策論争とは、切迫した問いと回答の必要性をもたらしたはずの「新たな（流入し定着しつつある）外国人」ではなく、「“外国人”として存在は希薄になりつつある」既に定着していた外国人を巡るものということになる。

要するにナショナル・アイデンティティの揺らぎや不安の言説のみからでは、外国人政策を企

群からは見出し難い⁽³⁾。では<有益な外国人>と<有害な外国人>イメージが両方とも見だし得ないのはなぜか。外国人が「有益か否か」、「有害か否か」を判断するためには、ナショナルな視座（例：日本社会にとってどうか）より行われる必要があり、そのような視座を最も安定して確保しているものがナショナルな主体（例：われわれ＝日本人）ということになる。ナショナル・アイデンティティの揺らぎの言説とは、このようなナショナルな主体の揺らぎを語っていることに等しく、ナショナルな視座を安定的に保持できる主体の欠如を宣言しているも同然である。であれば、第三期において<有益な外国人>－<有害な外国人>という二項対立的な図式が現れないのも当然であろう。

上記の二項対立的な図式は、次の第四期になって再び現れてくるのだが、その理由を含めて、まずは第四期のうち前期の記事における外国人言説の分析を進めることにしよう。

IV. 第四期前期（1998年後半～1999年）

－「強い主体」と<有益な外国人>－<有害な外国人>イメージの混在－

第四期の前期では、「強い主体」としての在日外国人イメージが、特集『『在日コリアンパワー』が日本を動かす スポーツ、芸能からビジネスまで変貌するマイノリティ世界の現在』（1998年7月8日号）や、特集「激変 日本人が知らない在日外国人の生き様」（1999年3月10日号）のように、「在日コリアンパワー」や「生き様」といった表現で明示されている⁽⁴⁾。これらは強い主体としての在日外国人をイメージさせるものである。また「変貌する…」や「激変」という言葉に象徴されるように、在日外国人の強い主体性は何か大きな変化の過程のなかにあるものとして示唆されている。このような強い主体性（「底力」や「生き様」）は「日本を動かす」潜勢力を秘めたものとして、あるいは「日本人が知らない」ものとして提示される。要するに強い主体としての在日外国人とその潜勢力とに、ホスト社会（日本社会）がどのように関わることになるかは、彼ら・彼女らが変化の過程のただ中にあるとされることも含め、未知数の部分を残しているということになるだろう。

ここで<有益な外国人>と<有害な外国人>というイメージがともに、一見正反対でありながら強い主体としての外国人イメージをその前提として共有している点を指摘したい。もし外国人が弱い主体であるならば、そのような外国人はその弱さゆえに「有益」とは見なされないであろう。主体の強さが彼ら・彼女らの持つ個人的な人的資本に由来するにせよ、経済資本や文化資本、社会関係資本に由来するにせよ、いずれの資本からも強さや利益を引き出せない者は、ホスト社会にとっても利用価値の少ない＝「有益でない」外国人ということになりかねない。同様に外国人が主体として弱いのであれば、そもそも彼ら・彼女らがもたらす「害」をことさら気にする必要もないはずである（いわゆる「痛くも痒くもない」状態）。それは「有害」というより、むしろ<無害な外国人>と呼ぶべきものになるだろう⁽⁵⁾。

<有益な外国人>と見なされる場合にも、<有害な外国人>と見なされる場合にも、強い主体としての外国人イメージという点では共通であり、その「強さ」がホスト社会によってポジティブに評価されれば<有益な外国人>イメージへと、ネガティブに評価されれば<有害な外国人>イメージへと結びつけられる方向性が生じることになる。

表2 第四期前期の『SAPIO』在日外国人関連記事（1998年後半～1999年）

1998年 7月8日	<SIMULATION REPORT>「在日コリアンパワー」が日本を動かす スポーツ、芸能からビジネスまで変貌するマイノリティ世界の現在
〃	力道山から新井将敬まで70万人在日コリアン50年史の光と闇 戦後史「銀座の虎」と恐れられた政商も…（辺真一）
〃	国籍とは？民族とは？ 自らの苦悩をパワーに変えた在日コリアン「ヒーロー列伝」サッカー、野球、格闘技…日本のスポーツ史は彼らなしには語れない（李淳駟）
〃	帰属意識 在日コリアン社会を変貌させる「国籍」「民族教育」「参政権」の流動化 民族のアイデンティティは急速に拡散しつつある（姜誠）
〃	バイタリティー ソン・ドンヨルが新人時代に尊敬し影響を受けた「渡韓在日プロ野球選手」（木村元彦）
〃	W杯 在日コリアン「外国籍特別枠」選手にも「2002年」へのチャンスを与えるべきだ 同じJリーガーなのに、なぜ出場資格がないのか？（崔仁和）
〃	ビジネス 「日本人に喜ばれたら韓国がよく見えるはず」それが私の祖国愛だ 「値下げ」で成功したMKグループ総帥の民族哲学（青木定雄）
〃	メディア マスコミの図式化された報道が彼らを「見えない存在」にしてしまう「強制連行」「指紋押捺」ばかりでは「在日」は分からない（野村進）
〃	日本化 アンビバレントな感情に悩みつつ日本に土着した2世・3世の「自信」ニューカマーが見た「在日社会」の現在（呉善花）
〃	ルーツ 「個人」が「世界」を相手にするとき最後に問われるのは「民族性」です 金日成の前で歌った歌姫から若者へのメッセージ（田月仙）
〃	演劇 「在日」とは海を渡って自分を探し、挫折してまた旅立っていく「人魚」だ 劇団の代表作で描いた「はざま」の物語（金守珍）
〃	街づくり 阪神大震災の共通体験で生まれた「アジア人意識」が行政を動かした 神戸市長田区で進む「アジアタウン構想」（鶴飼克郎）
〃	裏世界 許永中ほか金融闇社会を牛耳る「在日裏ネットワーク」の底力 無法地帯を支配するのは「カネと暴力と情報」（伊藤博敏）
〃	送金問題 巨額不良債権！「朝銀大阪」の破綻で「北への送金」離れが加速 こんどは日本人の血税が北朝鮮への送金を肩代わり？（出井康博）
10月28日	日本が治安大国なんて大ウソだ 武装・凶悪化「外国人犯罪」が急増している！（田村建雄）
1999年 1月13日	<SIMULATION REPORT>日本「1999年大国難」
〃	外国人犯罪の日本人被害者急増 強盗71%、レイプ100%の凄惨！ 警視庁特捜隊100人体制も無力でしかない（溝口敦）
3月10日	<特集> 激変 日本人が知らない在日外国人の生き様
〃	窃盗団 プロが襲い、「ドロボウ市」で売人が捌く ポスは中国の企業経営者だ！ 中国では資金繰りが苦しくなると「日本で少し稼ごう」が合い言葉（田村建雄）
〃	犯罪捜査 外国人マフィアvs特捜隊「迎撃捜査」「歌舞伎町は半年以内に山場を迎える」（高田一郎）
〃	新参入 原宿・新宿の新しい主役 アフリカ人は「高学歴エリートだ」 ガーナ、ナイジェリア…日本人の先入観は間違っている（境分万純）
〃	政治闘争 あるミャンマー人の告白「私はなぜスーチーより軍事政権を選んだか」 在日・元民主活動家、10年目の選択（生江有二）

〃	本音と建前 あなたはガツンと言える？ 彼らの語る「ヘンなニッポン」「ウンザリニッポン」 文化の断層による軋轢を怖れすぎる (田畑満美)
〃	提言 このまま「労働開国」を続ければ日本は古代ローマ帝国の二の舞になる *外国人労働者問題 (西尾幹二)
8月11日	日本の治安は崩壊している 外国人犯罪 誘拐、ビデオ、クスリ漬け…不良外国人の日本人レイプが倍増 快楽目的ばかりか、ビジネスにしている凶悪犯の手口を公開する (一村精)
〃	中国「秘密結社の乱」 在日華僑 反体制活動家、犯罪者、宗教、スパイ 全てを呑み込む「新華僑」 互助組織 巨大な在日中国社会に広がる「見えない力」 (樋泉克夫)

(注)大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』(各年版 紀伊国屋書店)を用いた記事検索 (検索キーワード=「外国人」)に加え、実際に雑誌記事を読んだうえで筆者が作成。

もしそうであるならば、第四期前期における強い主体としての外国人イメージのもとで、例の二項対立的な図式が再浮上する可能性は高いはずである。しかし同時に、強い主体としての在日外国人と「われわれ=日本人」がどのように関わることになるかは、未知数な部分を残してもいたことを想起してみよう。例えば、1999年3月10日の特集記事の前文では、「はたしてこれから日本社会は、彼ら在日外国人とどのように付き合い、共生していけばいいのか」との問いが発せられ、「そのことを考えるうえでも、まずわれわれは、彼らの知られざる生き様と日常を知る必要がある」とされる。ホスト社会(日本社会)と在日外国人との関係性が未知数であることは、強い主体としての在日外国人がホスト社会によってどう評価され、<有益な外国人>と<有害な外国人>のどちらのイメージへと方向付けられることになるかも、容易には確定することが困難な状況を意味する。

実際、1998年7月8日の在日コリアンに関する特集記事では、冒頭の記事「力道山から新井将敬まで70万人在日コリアン50年史の光と闇」に典型的なように、スポーツや芸能、ビジネスの世界で活躍する在日コリアンが取り上げられる一方、戦後日本の裏世界で暗躍してきた「闇の世界の帝王」と呼ばれた在日コリアンも取り上げられる。これら在日コリアンの「光と闇」とされる事例は、前者(光)が<有益な外国人>イメージにむすびつきやすいものであり、後者(闇)が<有害な外国人>イメージに結びつきやすいものといえるだろう。特集全体としても、在日コリアン社会の変容を特集の基調としながら(例:「在日」のアイデンティティももはやひとつではない)、ホスト社会にとって<有益>たりうる可能性を秘めた様々な在日コリアン像が、スポーツや文化、ビジネスの世界で、あるいは日本社会にとって在日コリアン自体が模倣すべき<有益な>モデルとしても語られる⁽⁶⁾。他方で特集の最後では、「無法地帯を支配」する「在日裏ネットワーク」の存在という形で再度<有害な外国人>イメージの側面が紹介されるのである。

同様のことは、1999年3月10日の特集「激変 日本人が知らない在日外国人の生き様」についても該当する。ただ、こちらでは外国人窃盗団や外国人マフィアを取り上げた記事での<有害な外国人>イメージの方が、「高学歴のエリート」のアフリカ人の記事のように、ホスト社会にとって<有益な外国人>になりうる事例よりも明快に描かれてはいるが。

このように同時期における特集記事においては、在日コリアンの特集においても、ニューカマー外国人を中心とした特集においても、<有益な外国人>と<有害な外国人>という二項対立的な

イメージの混在がみられた。これらの混在に関しては、第一に在日外国人が強い主体としてイメージされる傾向がより強まったこと、第二に強い主体としての在日外国人は、その強さゆえにホスト社会やホスト社会のマジョリティにとっては利用可能性を期待できるが、一方でその強さは時に犯罪などのリスク源としても認知されうる。前者であれば<有益な外国人>イメージに、後者であれば<有害な外国人>イメージにより強く結びつけられること、第三に強い主体性を持った在日外国人とホスト社会(日本社会)およびマジョリティ(日本人)がいかなる関係を結びうるかは未知数で未確定な部分が多いと記事では見なされているため、在日外国人のイメージを一義的に確定することは出来ず、その結果が<有益>-<有害>という二項対立的なイメージの特集記事上での混在を生じたこと、を指摘できる。

なお、もう一つ第四期前期に関して指摘しておこう。実は第三期でいったん『SAPIO』の誌面からほとんど消えていた外国人犯罪を扱った記事が、特集ではなく単独記事という形ではあるが、この時期になって再び復活したことである。「日本が治安大国なんて大ウソだ 武装・凶悪化「外国人犯罪」が急増している！」(1998年10月28日号)、「日本人の犯罪被害者急増」(1999年1月13日号)、「日本の治安は崩壊している 外国人犯罪」(1999年8月11日号)といった一連の記事で強調されるのは、「武装・凶悪化」する強くてコワイ他者としての外国人イメージであり、日本人の被害者化(逆に言えば外国人の加害者=主体化)の進行であり、「不良外国人」という名で呼ばれる彼らの存在自体がリスク源と見なされるという外国人像である。これらの記事においても、在日外国人の強い主体化とリスク源としての<有害な外国人>イメージが成立していることを確認できる。ここでは<有害な外国人>イメージのみが語られ、<有益な外国人>イメージは完全に分離されているのだが、同様の記事はこの後も継続して現れ、第四期の後期に至って外国人犯罪のみを取り上げた一連の特集という形にまで拡張していく。その意味で第四期の前期は、その後の『SAPIO』における外国人言説を方向付けた転換点となった時期であったと言えるだろう。

<注>

- (1) 奥村隆は、異質な他者に対する特定のイメージは、例えば「かわいそう」というイメージが他者への「同情」や「援助」に、「こわい」というイメージが他者の「排除」に結びつきやすいように、固有の「他者への対処の技法」へ方向づけられると指摘している[奥村, 1998: ch. 3]。
- (2) ちなみに記事『「在日の参政権」で激論 2時間半!』のなかで激論を戦わせている論客2名は、「在日朝鮮人」と「在日韓国人」の研究者である。政策論争であるはずのこの記事においてすら、政策を語る主体としての「われわれ=日本人」は、(それが良いか悪いかは別として)その姿を表していない。
- (3) ただし先述の在日参政権をめぐる記事では、「二重国籍を認めて政治参加させ、その中でルサンチマンが解けるように日本社会がすべきだと思っています。そうでなければ貴重な人材を有

効に使えない」とあるように、在日コリアンを日本社会にとって<有益な外国人>として提示しようとする語が見られる。特定の外国人政策が問われた時に、ホスト国にとって外国人が有益か否かという「動機の語彙」はやはり強力な正当化能力を持つのであろう。「動機の語彙」については[Mills, 1963=1971:344-355]を参照のこと。

- (4) 「生き様」という表現は、たとえば「生き方」といった表現と比較した場合、それ自体の尋常でない激しさとか、逆境をものともしない逞しさやしたたかさをより鮮明にイメージさせるものだといえよう。
- (5) このような<無害な外国人>は、<有害な外国人>と異なってリスク源と見なされる可能性は低い、<有益な外国人>とも見なされがたい以上、ホスト社会やマジョリティによって放置される可能性が高い。ただし樋口直人がZ. バウマンのいう第二の近代における「放浪者」の生き方を引用して指摘するように、「快適な移動を楽しむだけの資源」を持たず、「たどりついた場所で糊口をしのぐ術を見つけなければならない」放浪者たちは、「無害とされるうちは放置されるが、リスクの発生源とみなされると、自らの意志とは関係なく追い払われる可能性にさらされ続ける」[樋口, 2005:34]。ならば<無害な外国人>と<有害な外国人>の違いとは、同じ資源を持たない移民や難民といった「放浪者」をホスト社会やマジョリティがどう見なすかの違いにすぎず、両者を隔てる境界線は限りなく薄く流動的で、どちらにカテゴライズするかという状況定義権を握っているのは、もちろんホスト社会（のマジョリティ集団）ということになる。
- (6) なかでも記事「在日コリアン社会を変貌させる『国籍』『民族教育』『参政権』の流動化」は、「国際的な大競争時代の到来を前に、21世紀に通用する国家的アイデンティティ、あるいは日本人としてのアイデンティティを確立しなくてはと、苛ついている」日本あるいは日本人にとって、「多くの分断要因を抱え、国家と民族の狭間で常にアイデンティティを模索して生きざるをえなかった在日コリアンの知恵と経験」がモデルたりうると主張する点で興味深い。これはアイデンティティ・ポリティクス上の<有益さ>を在日コリアンの「パワー」に見出した事例といえるだろう。もちろんそれは当記事の筆者は気がついているように、「日本社会が在日コリアンに過去、何を強要し、何を奪ってきたのかを知らない無知の所産」としてのみ、容易に気がねなくモデル化が出来るようなものに違いない。

<参考文献>

- 奥村 隆 1998 『他者という技法—コミュニケーションの社会学』日本評論社。
- 倉 真一 2000 「外国人のイメージ—日本にマスメディアにおけるイラン人を事例に—」『宮崎公立大学人文学部紀要』8(1), 宮崎公立大学: 71-89。
- _____ 2002 「1990年代日本における入国管理政策と非行性の産出」『宮崎公立大学人文学部紀要』10(1), 宮崎公立大学: 67-87。

- _____ 2006 「保守系オピニオン誌における外国人言説(1) —1990年代前半までの雑誌『SAPIO』を中心に—」『宮崎公立大学人文学部紀要』14(1), 宮崎公立大学: 113-128。
- 樋口直人 2005 「エスニシティの社会学」『新・国際社会学』名古屋大学出版会: ch. 2。
- Bauman, Zygmunt 1998 "Tourists and Vagabonds", *Globalization : The Human Consequences*, Columbia University Press : ch. 4.
- Mills, C. Wright 1963 *Power, Politics and People*, Oxford University Press. = 1971 「状況化された行為と動機の語彙」『権力・政治・民衆』みすず書房: 344-355。

<参考資料>

- 大宅壮一文庫(編)『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』(各年版) 紀伊国屋書店。
- 小学館(編)『S A P I O』(1989年創刊〜)小学館。

